

プランター



庭の杉の木は、何年か前に切ってしまった。

彼はよく、その根元を掘り返していた。

黒い毛並みの雑種犬で、木の周りでしょっちゅう遊んでいた。なぜか同じ方向ばかりに、ぐるぐるとまわる癖があった。

首輪ぎりぎりにまで、鎖を木に巻き付けてしまい、とうとう身動きが取れなくなると、恨めしそうにぼんやりとした顔をしてきゅんきゅん鳴いた。そんな彼を見つけると、わたしは決まって、おまえバカだねー！笑いながら、鎖を木から外してやった。

彼は、わたしを見るといつもシッポを振って、鎖の長さの及ぶ限りに追いかけてきた。

杉の木を切ったのは、彼が居なくなってから随分過ぎた後だ。

今、その辺りは、只の平らな地面である。わたしは、そこを掘って腐葉土を入れて、ハーブの苗を植えようとしたのだ。

深く地面を掘り返していると、スコップの先に大きな石がガツンと当たった。それを取り除こうと、穴の中にかがみ込んで、驚いた。掘り返した土の中から、彼の匂いがしたのだ。しかもそれ程、薄れていない。

この辺りを暇にあかせて繰り返しては、自分が掘った穴の中に埋まっていた彼の姿を思い出した。

ぐらり。と身体が傾いたような気がした。

こんなに経ってもまだ、生きていた跡が残っているなんて不意打ちだ。何も喋らない犬の癖に。不意打ちだ。思い出した。

顎だけを穴の縁から外に出して、所在なげにしていた顔を思い出した。

みかんが嫌いだったことを、思い出した。

杉の木を切ってしまうよりもずっと前に、逝ってしまったのに。どこにもいなくなってから、こんなに時間が経っているのに。記憶は去らない。ただくっきりと、思い出せる。

ばか。と、思いながら。わたしは元の土を、出来るだけ元の順序になるように埋め戻し始めた。真新しく買って来た腐葉土をそこに入れるなんて、とんでもなかった。元に戻さなければ。

バカ犬。と、わたしは悪態をついた。おすわりと、おあずけしか、覚えなかった癖に。さっさといなくなった癖に。

なんで今更、あんたの為にわたしが泣かなくちゃいけない。

バカ犬。

結局、ハーブは、プランターに植えた。

